



TITLE:

第5章 自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

AUTHOR(S):

笹川, 尚紀; 伊藤, 淳史; 千葉, 豊

CITATION:

笹川, 尚紀 ...[et al]. 第5章 自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査. 京都大学構内遺跡調査研究年報 2015, 2013: 203-226

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226467>

RIGHT:

第5章 自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

笹川尚紀 伊藤淳史 千葉 豊

2013年度、大学構内14の地点で、自家発電設備の設置が計画された（第1章参照）。このため、当センターでは、周辺地区でおこなわれた過去の調査成果や遺跡の性格を勘案して、①発掘調査の必要な地点5カ所（図版1-397・400・402・403・405）、②慎重な立合調査の必要な地点5カ所（図版1-412・413・422～424）、③通常の立合調査が必要な地点4カ所（図版1-406・418～420）に分けて、調査を実施することにした。②の慎重な立合調査とは、専属の作業員を用意し、慎重な掘削と記録作業をおこなったものである。

以上の調査のうち、整理作業が終了したものを以下に報告する。

1 本部構内A Z30区の発掘調査

(1) 調査の概要

本調査区は本部構内の北東辺に位置し、吉田本町遺跡のうちに含まれる（図版1-397）。周辺の調査成果をふまえたうえで、中世の遺跡のひろがりにとくに留意しつつ、近世にいたる土地利用の変遷にかんして究明することを目的に発掘調査を実施した。調査期間は2013年5月7日から5月24日、調査面積は42.9㎡となる。

出土遺物は縄文時代から江戸時代にまでおよんだものの、その多くは小片で、整理箱1箱強の分量にすぎなかった。

なお、発掘調査と遺物整理作業は笹川尚紀が担当し、長尾玲が補佐した。このほか、磯谷敦子・高野紗奈江・杵佐和子・河野葵の助力をえた。

(2) 層位

本調査区の南東部、南壁際に土層観察用の畔をもうけた。その理由は、そのほかの箇所が現代における掘削によって大きく破壊されていたからである。そこで、その層位を図示したうえで（図110の上）、堆積状況にかんする説明をおこなっていく。

第2層の灰褐色土1は近世、第3層の茶褐色土は中世の遺物包含層となる。後者を掘り下げていく過程で、集石S X 1を検出した。

第4層は吉田キャンパス一帯で多くみられる黄色砂で、弥生時代前期末ごろの洪水性堆積となる。ただし、本調査区ではY=2509.5のあたりよりも西側では認められず、そこに

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

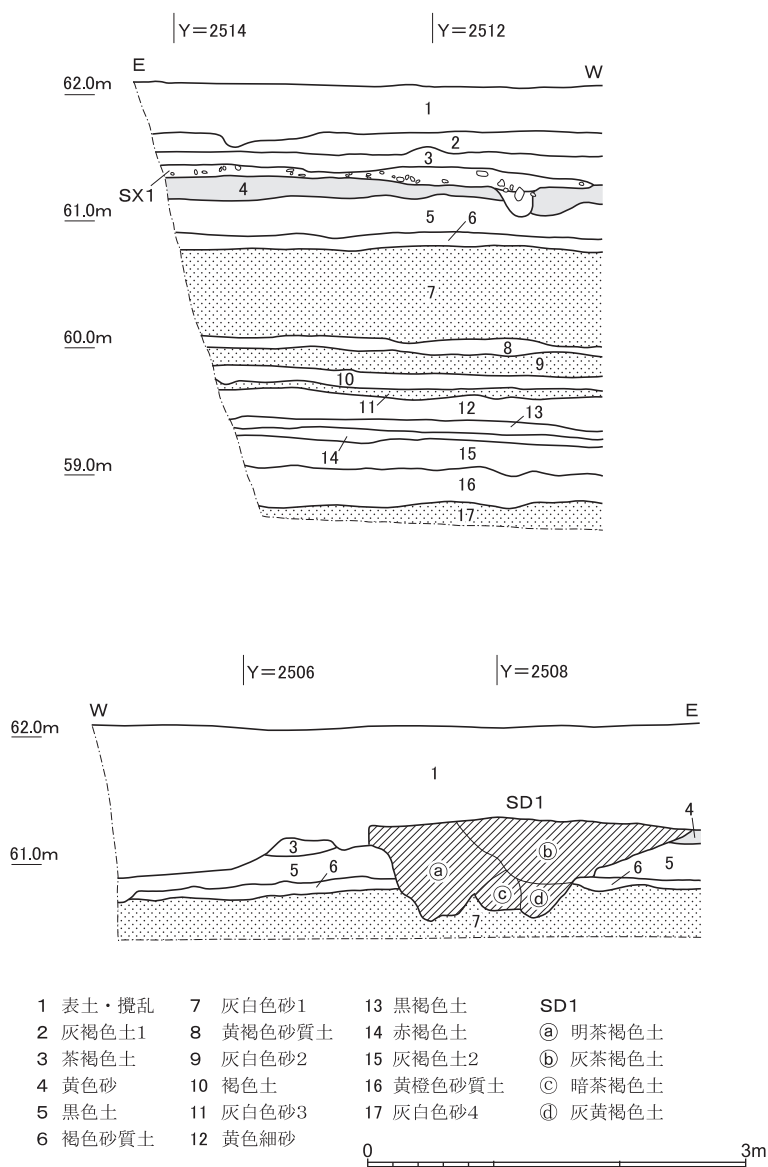


図110 調査区南東部東西畔（上）および北西部北壁（下）の層位 縮尺1/60

は茶褐色土がひろがっていた（図110の下）。

第5層は黒色土で、出土した遺物をふまえると、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土層であると推断される。第6層の褐色砂質土は、黒色土と第7層の灰白色砂1のあ

いだに位置し、漸移的な様相を示している。

大部分が水成堆積物となる第7層から第12層までを重機でとりのぞいたところ、第13層の黒褐色土、第14層の赤褐色土、第15層の灰褐色土2という土壌化層が調査区全体ではほぼ水平に積み重なっているのを確認しえた。第13層の黒褐色土上面（図版37-1）では、第12層の黄色細砂を含む小さな穴が数多くみうけられた。

とりわけ注目されたのは、第13層の黒褐色土と第14層の赤褐色土のうちに橙色の小さなかたまりがいくつか目にとまった点で、南九州の鬼界アカホヤ火山灰（K-A h）にあたるとのではないかと推測された。

そこで、そのあたりの土層を観察用の畔から筒状にサンプルとしてとりだし、株式会社京都フィッシュン・トラックに分析を依頼したところ、第13層と第14層にそれが多く混じっているのが判然となった。くわえて、第15層の灰褐色土2にかんしては、約7300年前の鬼界アカホヤ火山灰〔町田・新井2003〕の降下よりも古い土層であると指摘されるにいたっている。

なお、それより下は、第17層の灰白色砂4を確認して、掘削を終了した。

ちなみに、第13層から第15層にかけて慎重に掘り進めていった結果、第15層の灰褐色土2より土器の細片1点をみつけだすことができた。

(3) 遺 構

本調査区からは、中世と近世の遺構がみつかった。しかしながら、現代における攪乱によって、黒色土以上が残っていたところは、全体の2/5ほどの面積にすぎなかった。また、近世の遺構はピットが5つ確認されただけであった。したがって、ここでは中世の遺構にかんして説明をくわえていくことにする（図111）。

茶褐色土を掘削している過程で、集石S X 1を検出した（図版37-2）。その標高は61.2 mから61.5mのあいだにおさまる。集石のうちには拳大のものもみうけられたけれども、その大半はそれよりも小さなものであった。その上部からF₂類の土師器皿の破片（IV 5）がとりあげられているので、集石S X 1は15世紀以前にもうけられた蓋然性が高い。整地に関係するとも推測されるものの、それが作られた目的については不明とせざるをえない。

黒色土上面で検出された南北溝S D 1は、その南半が現代の攪乱によって破壊されていた。本調査区北西部の北壁を精査した結果、㉔ののち㉔・㉔㉔と2度の掘りなおしがおこなわれているのを把握しえた（図110の下）。深さはいずれも40cmほどで、もっとも低いところの標高が約60.5mをかぞえる。集石S X 1よりも前に造作されたことは明らかである

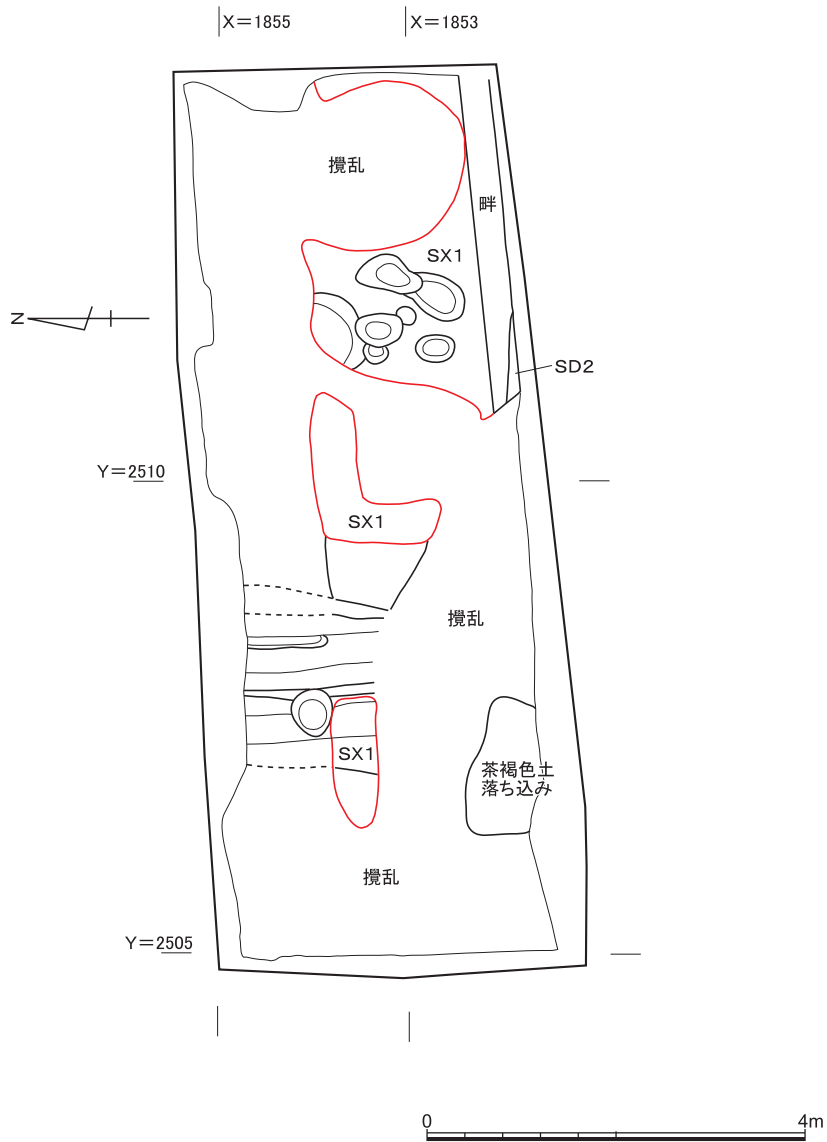


図111 中世の遺構 縮尺1/80

ものの、遺物がまったく出土しなかったがゆえに、その時期をしほり込んでいくことはかなわなかった。

なお、畔の部分、南壁際で集石 S X 1 の下から東西溝 S D 2 が検出された。そのもっとも深いところは調査区外に位置している。なお、本調査区南西部において茶褐色土が落ち

本部構内A Z30区の発掘調査

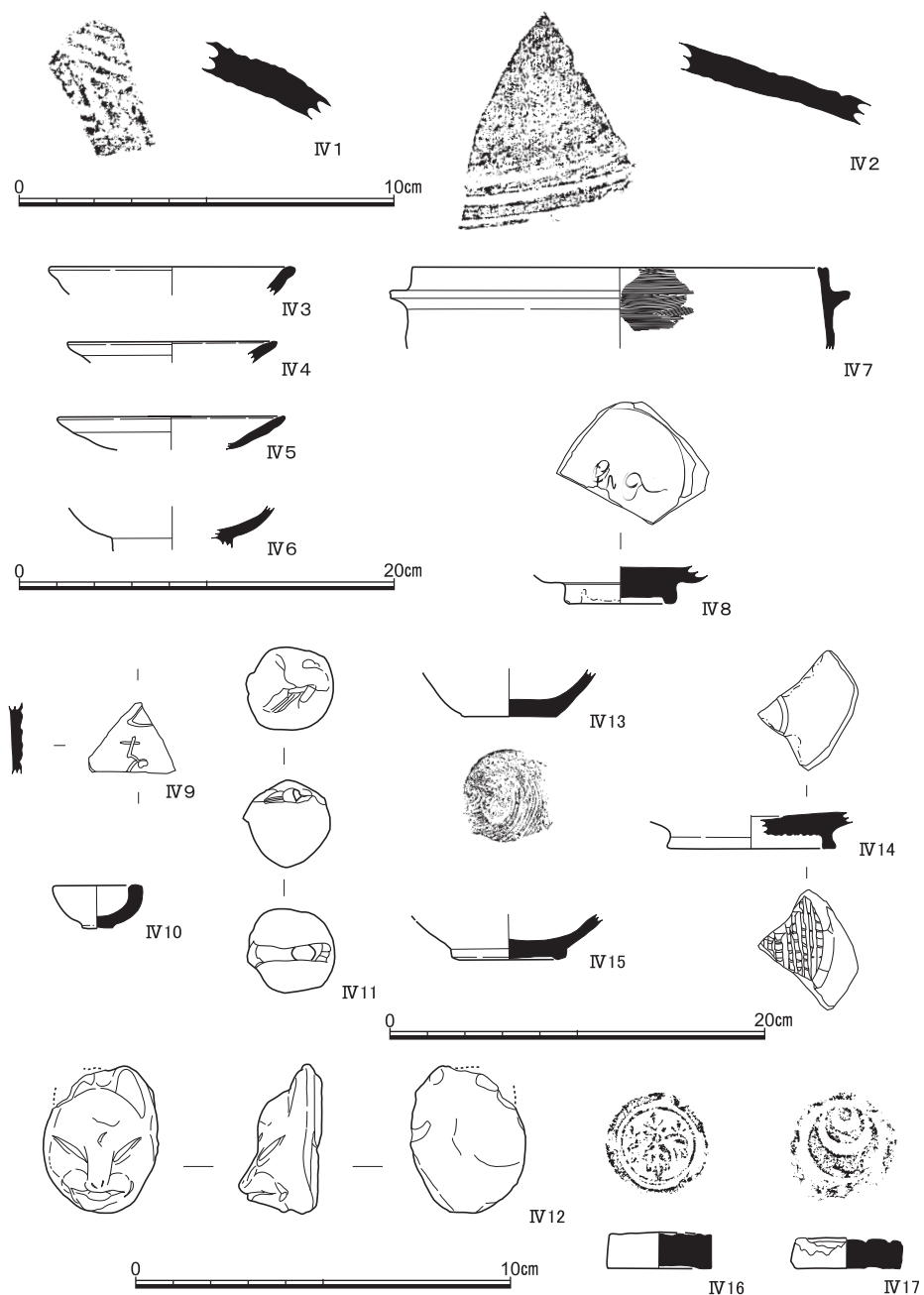


図112 黒色土出土遺物 (IV 1 縄文土器, IV 2 弥生土器), 茶褐色土出土遺物 (IV 3 ~ IV 5 土師器, IV 6 須恵器), 茶褐色土落ち込み出土遺物 (IV 7 瓦器, IV 8 青磁), 灰褐色土出土遺物 (IV 9 陶器, IV 10 磁器, IV 11・IV 12 土製品), 表土・攪乱出土遺物 (IV 13・IV 14 古瀬戸, IV 15 白磁, IV 16・IV 17 泥面子) IV 1・IV 2・IV 9 ~ IV 12・IV 16・IV 17 縮尺1/2

込んでいるところがみつかっている。その底部の標高は59.8mくらいとなる。遺構である公算は大きいものの、まわりに攪乱がひろがっており、その性格についてつまびらかにすることができなかった。しかるに、東西溝SD2のつづきである可能性も十分に残されており、今後この付近を発掘調査するに際しては留意が必要となろう。

(4) 遺物 (図112)

IV1は縄文土器。縄文を充填させている。IV2は弥生土器。下端に2本の沈線が認められる。胎土に石英などの小石が密に含まれている。以上は黒色土より出土。

IV3は2段撫で手法のC₂類の土師器皿。IV4・IV5は1段撫で手法のF₂類の土師器皿。IV6は古代の須恵器杯の底部片。以上は茶褐色土より出土。

IV7は瓦器羽釜。口縁部が直立し、端部断面が方形を呈する。IV8は青磁の底部片。高台は断面四角で、その内部はえぐりがいささか浅い。畳付およびその内側を露胎とする。底部内面に文様がかすかにみうけられる。以上は茶褐色土落ち込みより出土。

IV9は透明の釉がかかる白色の陶器の破片。外面にひらがなが刻まれているのが確認される。蓮月焼であろう。IV10は白色を呈する磁器の紅皿。IV11は土鈴。紐などを通すための孔があげられている。IV12は土製品。狐を象っている。以上は灰褐色土より出土。

IV13は古瀬戸の底部片。底部外面に回転糸切り痕が認められる。IV14は古瀬戸の底卸皿。中期様式のものであろう。底部内面中央部分が円形にややくぼんでいる。IV15は白磁碗の底部片。高台は低く、外面を露胎とする。IV16・IV17は泥面子。前者の裏面には、えぐった痕跡がみうけられる。以上は表土・攪乱より出土。

(5) 小 結

特筆すべきは、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の存在が確認された点である。

以前に、本調査区の北東、今出川通の中央部分で発掘調査が実施された結果、厚さ約10cmの黒色泥砂層Ⅲにおいて、それがブロック状に含まれているのが観察されている〔長戸ほか1997〕。黒色泥砂層Ⅲは標高60.1mの位置でほぼ水平に堆積していたということなので、本調査区ではそれよりも0.6~0.8mほど深いところで鬼界アカホヤ火山灰が認められたことになる。はたして、これが混じる土層はどのあたりにまでひろがっているのか、今後の発掘調査のおりには注意が必要となろう。

また、それよりも古い土層から1点の土器の細片が出土しており、縄文時代早期の遺物に相当する可能性が高い。こうした点をふまえれば、将来、その時期の多くの遺物、ひいては遺構の発見が期待できるのではないかと思われる。

2 医学部構内における調査

(1) はじめに

京都大学（南部）基幹・環境整備（自家発電設備）工事にともなう掘削は、医学部・病院構内においては、G 6～G 10（医学部構内）・G 12・G 13（病院西構内）の7地点で計画された（図113）。このうち、遺跡の遺存が予想され面積も広い医学部構内G 9地点（A O 20区）については発掘調査とし、それ以外は、既設建物や管路による破壊の可能性が見込まれたため、掘削時の立合調査とした。ただし、G 6・G 7地点については、隣接地点の発掘調査で重要な成果が得られている履歴を考慮し、遺構が遺存していた場合に備えて専属の作業員を配置し慎重な掘削と記録作業をおこなった。以下、G 9地点の発掘調査成果を中心に、立合調査の所見もあわせて報告する。

なお、本節に関連する調査はすべて伊藤淳史が担当し、内記理の助力を得た。出土遺物の整理・実測と報告作成については、新田和央・鶴来航介・佐々木夏妃の助力を得た。

(2) 医学部構内A O 20区（G 9地点）の発掘調査

概 要 調査地点は、医学部構内東辺に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる（図113、図版1－400）。発掘は、土置き場を確保する都合上対象地を南北に2分して北半→南半の順で実施し、調査面積は合計173㎡、調査期間は2013年9月25日から10月16日。

周辺では、南方の134・248地点一帯、北方の74地点東半域では、遺跡地の基盤層である砂や粘土を採取した遺構とみられる不定形な掘り込みが多数見つかっており、中世～近世の遺物が多数出土している。一方で、東方の吉田南構内では、平安時代の鋳造遺構や中世の屋敷地関連の遺構・遺物が密度濃く確認されている。このように、土の採取される空間と居住・生産関連の領域との境界付近に位置し、今回の調査でもいずれかの成果が得られるものと期待された。

調査の結果、現地表面のアスファルト舗装直下で基盤の黄褐色粘質土層上面があらわれる状況であることがわかり、深い攪乱はほとんどなかったにもかかわらず、包含層の多くが削平されていた。しかしながら、北半では中世の井戸状遺構SE 1・SE 2など深い掘り込みの下部が遺存しており、それらを中心に整理用コンテナ5箱におよぶ遺物が出土した。土の採取エリアが調査地周辺に及んでいなかったことや、基盤層の標高が高いと判明した点は、遺跡地周辺の中世の土地利用や旧地形を復元していく上で、重要な知見が得られたものといえる。

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

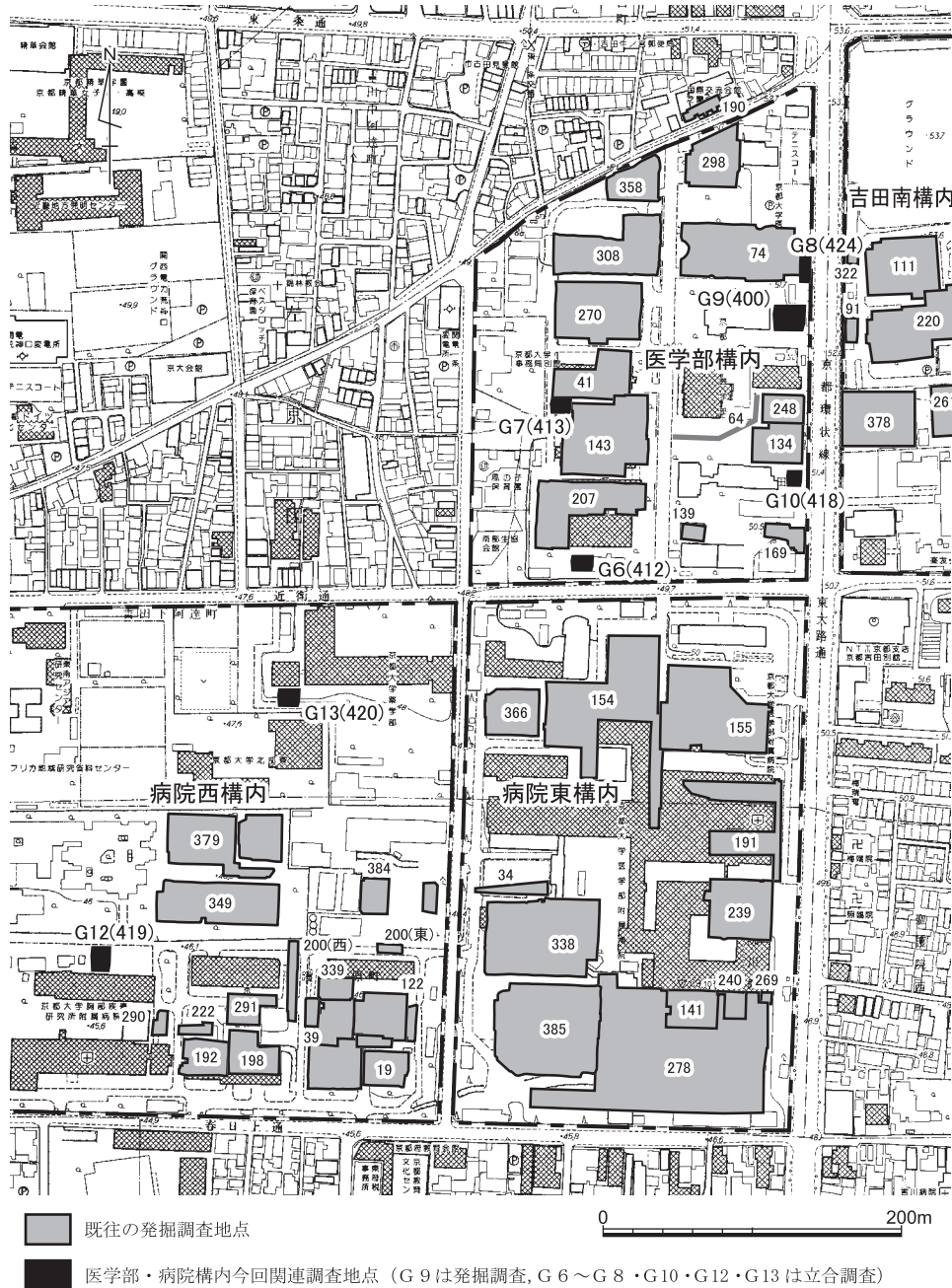


図113 医学部・病院構内関連調査地点の位置 縮尺1/5000

層 位 比較的遺存が良好であった調査区北壁の層位を示す（図114）。上述したように、40～50cm程度の表土・攪乱層（第1層）を除去すると、遺構の埋土の部分以外は基盤の黄褐色粘質土層（第4層）があらわれてしまい、水平に堆積する遺物包含層は確認されなかった。黄褐色粘質土層の上面のレベルは最も高い値で51.4mをはかる。

一方、調査区の東半域を中心に、黄褐色粘質土層を切りこむように東西幅5m程度の白色粗砂層（第3層）の堆積が認められる。調査区の東縁部に向かっては漸位的に細砂からシルト質、そして粘土質の土壌へと移行しており、深さは不明である。黄褐色粘質土層の上位部分から縄文後期とみられる粗製土器（図116-IV21）が採集されていることを考慮すると、その時期以降に大規模な自然流路が生じていたものとみられる。SX1・SD1をはじめとした中世遺構の多くは、茶褐色の砂質土を埋土としており、この白色粗砂層のひろがる範囲を中心に確認されている。なお今回は、より東方の吉田南構内では鍵層として確認される、弥生前期末の土石流堆積である黄色砂層は確認されなかった。

遺 構 調査区南半では上面の削平が著しかったため、調査区隅付近以外はまったく遺構は確認できなかった。北半では、井戸状の深い中世遺構SE1・SE2、集石SX1、土器溜SX2など、東半部に多く遺構がみついている。以下、個別に略述する。

SR1は、黄褐色粘質土層の上面が表土直下で露出する調査区北半西部ではっきりと検出され、白色の粗砂が埋積している小規模な流路。検出面で幅1m深さ50cm程度をはかる。調査区南半では上部が削平され底面付近のみが確認できた。縄文後期かとみられる土器片が出土しており（図116-IV18・IV19）、それ以降に埋積した先史時代の自然流路だろう。

SE1は、上部を攪乱で破壊されていたが、検出時で東西3.5m×南北2.5m程度をはかる隅丸長方形の土坑。埋土の上半を中心に14世紀代の土師器・陶磁器・瓦などが整理箱2箱分出土している。東辺は階段状に掘りこまれ、最終的に検出面から深さ約2mの標高49.2m前後で、2.5m×2m程度の底面に達する。この底面では、四隅に径・深さとも20cm程度の柱穴がはっきりと検出された（図版38-3）。層位で述べたように、調査区東半は白色粗砂の不安定な地盤に中世遺構が掘りこまれており、この遺構も壁面はかなり脆い。このため、崩落を防ぐために板材と組み合わせていた土留め杭の痕跡であった可能性も考えられる。平面の形状や規模から井戸と仮定して調査を進めたけれども、深度が浅く、また明瞭な水溜状施設の痕跡は確認できなかったため、断定するには至っていない。あるいは底面の痕跡などから、簡便な地下室状施設であった可能性もあろう。

SE2は、一辺2mあまりのほぼ正方形の土坑。調査区北半の表土直下で検出され、堅

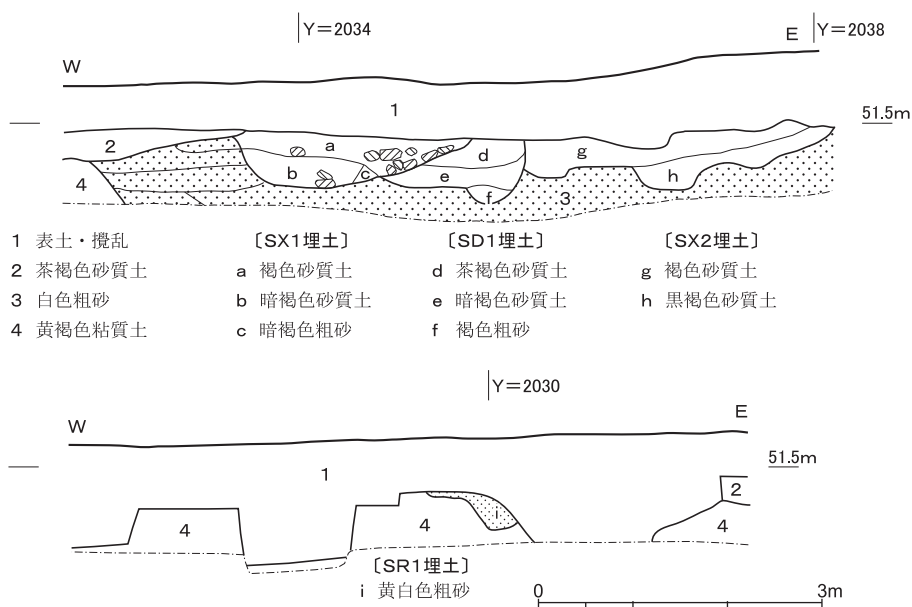


図114 G9地点北壁の層位 縮尺1/80

い黄褐色粘質土層を2m以上掘り抜いている（図版36-4）。土抗の中央やや南寄りに茶褐色土を埋土とする径70cm程度の円形の輪郭が検出でき、多量の14世紀代の遺物を包含している。その周囲は土混じりの黄褐色粘質土で強く締まり、遺物はほとんど含まない。井筒とその掘り形と理解するのが自然と思われる。この井筒かとみられる円形の掘り込みは、底まで2.5mあまりの深さがあり、最底部の標高は48.7m。底面付近は拳大の礫が40cm程度の厚さで密に埋積していた。このように、SE2はSE1に比べて井戸とみるべき特徴を多く備えているけれども、湧水を利用する井戸としてはやはり深度が浅く、また下部にそうした痕跡も確認できなかった。簡便な溜井状施設であった可能性もあろう。

SX1は、20cm程度大までの礫が密集して積み上げられた集石遺構。下部にある南北溝SD1埋積後に構築されている。北壁際で検出され、さらに調査区外へと続いていくため、規模は不明。中世後半期のものであろう。

SX2は、大型の常滑産陶器甕の破片が密集して積み重なっていた土器集積遺構。口縁部の破片などから最低2個体はあったことがわかっている（図118-IV79・IV80）。この遺構も北壁際で検出され、さらに調査区外へと続いていくため、規模は不明である。甕の編年の位置からみて、14世紀代の遺構と判断される。

SD1は、調査区東半をやや西に振れる方位で南北にはしる溝。大部分が削平されてし

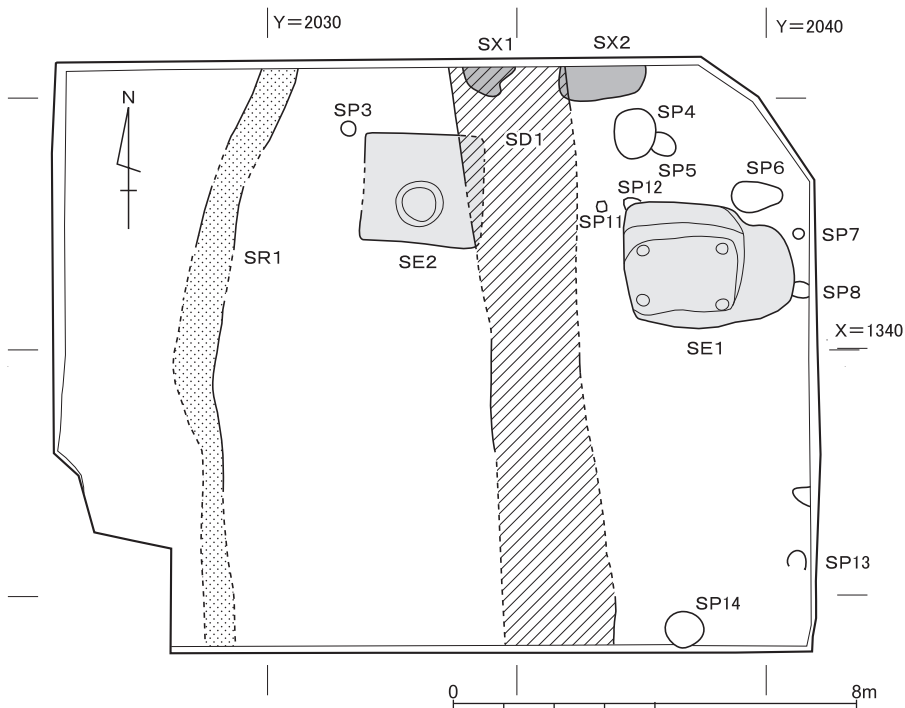


図115 調査区検出の遺構 縮尺1/150

まっているため本来の規模は復元しづらいが、幅2m深さは50cm以上ある断面逆台形のしっかりとした溝であったと想定される。上記のSX1やSX2はこの溝の埋積後に構築されており、一方でSE2の東縁はこの溝に切られている。こうした切り合い関係や、埋土から出土した土師器から、14世紀代に機能した遺構といえる。

以上のほか、削平を逃れた調査区北東域～東縁部にかけて、小規模なピットや浅い土坑SP3～SP14が検出できている。このうち、SP6は、完形に復元可能な13世紀前葉の土師器皿（IV77）が出土しており、中世前半期の遺構と判断しうる。またSP14からは、口頸部を欠いた奈良時代の須恵器壺が出土した（IV22）。古代の遺構であろう。それ以外は、出土した少量の土師器片から判断する限り、いずれも14世紀代以降の中世後半期の遺構であったとみなされる。

遺物（図116～119） 縄文時代～中世の遺物が整理箱5箱分出土している。大半は中世後半期の土器類であり、ほかに縄文および平安時代のものが微量ある。近世の遺物については、今回の調査区では包含層が完全に削平されていたこともあって、全く得られ

ていない。以下、時代・遺構別に説明する。

IV18～IV21は縄文時代の遺物。IV18・IV19はSR1，IV21はSR1東肩の黄褐色粘質土層の上部から，IV20はSE1への混入として出土した。IV18は粗製深鉢の頸部片で，一般に生駒西麓産とされる暗茶褐色で角尖石を多量に含む胎土である。外面は横位の撫で，内面は横位の削痕が認められる。IV21も粗製深鉢の底部で，厚手の器壁で暗褐色を呈する。やや摩滅気味であるが，内外面とも粗い撫で状の調整とみられる。IV19は無節の縄文施文がみられる破片。赤褐色を呈する厚手の器壁である。IV20は，櫛状施文具による斜線が交差する文様が認められる破片。厚手で，暗褐色を呈する。以上は，IV19については時期を特定しにくい，それ以外はおおむね縄文時代後期，北白川上層式期ごろに比定できるものであろう。

IV22～IV25は古代の遺物。IV22はSP13から単独出土した須恵器壺。胴部以下の1/2が残存する。肩部の張る小型の壺で，平城宮・京跡出土須恵器の分類で壺Lとされるものに相当する〔奈文研編2010〕。8世紀代でも後半の製品であろうか。IV23は「て」字状口縁をもつ土師器皿。やや厚手で，口径11cm。IV24は須恵器杯Bの底部。IV25は緑釉陶器。硬質焼成で，削り出しによる円盤状の底部をもつ。全面淡緑色の施釉がみられる。IV23～IV25は中世の遺構SE1やSE2に混入して出土したもので，平安中期，10世紀代ごろのものであろう。

IV26以下は中世の遺物。IV26～IV51はSE1出土遺物。IV26～IV34は赤褐色を呈する土師器で，一段撫で手法E₁類（IV26・IV30・IV31），E₂類（IV27・IV28・IV32・IV33），E₃類（IV29・IV34）がある。IV35～IV41は白色の碗で，大小の2種がある。小碗にはIV40・IV41のように凹み底のものが含まれる。IV42は一段撫で手法の皿だが，内外両面とも被熱にともない著しく黒変している。IV43は土師器ミニチュア碗で，口縁部は片口状になる。黄白色の精良な胎土である。IV44は土師器羽釜。口縁部は逆「く」字状に内折する器形で，端部は肥厚する。頸部には丈の低い鏝がめぐる。大和地域に特徴的とされる中世の土釜であり，搬入品だろう。IV45～IV47は瓦器。IV45は底部に退化した紐状の高台が付される碗。内面の暗文も退化してまばらとなっている。IV46も碗だが，外面から棒状具を押しつけることで六弁の輪花状に成形している。内面の暗文はまばらで，見込みに退化した花卉状のモチーフが描かれる。IV47は羽釜。IV48は灰釉系陶器で，古瀬戸の洗あるいは盤などとされる器形とみられる。内外両面に薄くまだらな灰釉が施釉され，口縁端部は凹線状に仕上げられる。IV49・IV50は白磁皿。IV49の口唇部は露胎している。IV51は剣頭文軒

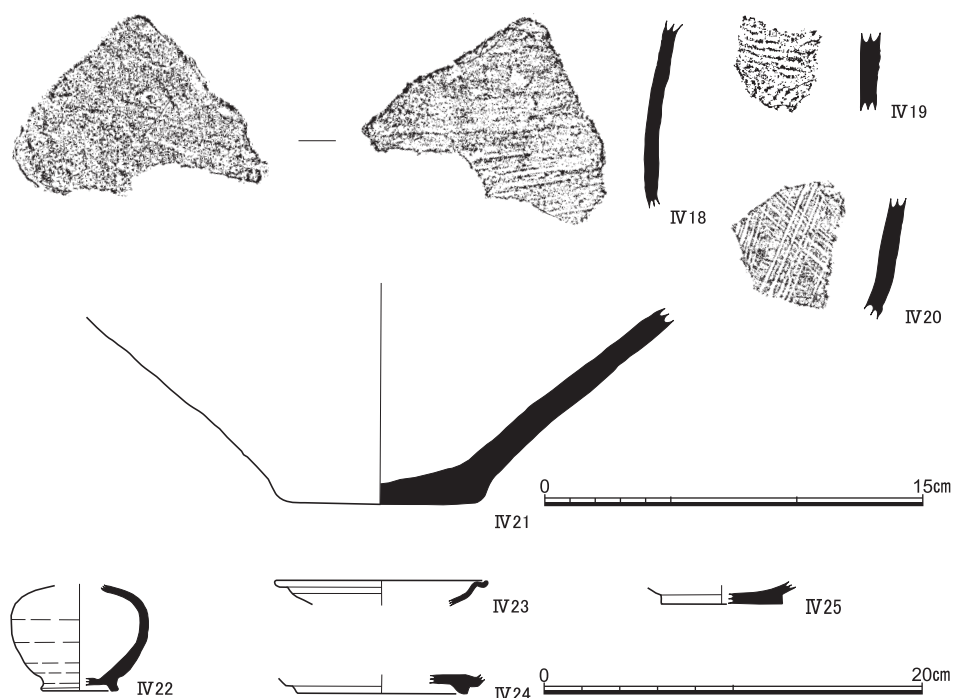


図116 縄文土器 (IV18・IV19: S R 1、IV21: 黄褐色粘質土、IV20: S E 1 出土) 縮尺1/3、古代の土師器 (IV23: S E 2 出土)、古代の須恵器 (IV22: S P 13・IV24: S E 1 出土)、緑釉陶器 (IV25: S E 2 出土)

平瓦。剣頭内部の弁が三条の隆線であらわされる。以上の遺物は、土師器碗皿類の編年的位置づけを中心にみた場合、京都市域でのⅦ期中～新段階ごろ〔小森・上村1996〕、14世紀前半代の一群と評価できよう。

IV52～IV72はS E 2 出土遺物。IV52～IV54・IV56～IV58は赤褐色を呈する土師器皿で、IV52・IV56～IV58がE₁類、IV53・IV54がE₂類。IV55は白色を呈する土師器皿で、二段撫で手法C₃類。厚手の器壁で、他の皿と質感が異なる。IV59～IV65は白色を呈する大・小の碗。小碗のIV64・IV65は底部が凹む。IV66は土師器羽釜のミニチュア。黄白色の精良な胎土である。IV67は瓦質焼成の小碗。全面撫で調整で磨きはみられない。IV68は瓦器碗。樟葉型とみられ、厚手で内面のみに粗雑な磨きが施される。退化した紐状の高台をもつ。IV69は灰釉系陶器の小碗。全面横撫で調整で、底部は回転へら起こしの痕跡がそのまま残る。IV70・IV71は白磁。IV70は皿で、口唇部が露胎。IV71は碗の底部であろう。IV72は陶器すり鉢片。明灰色の堅緻な焼成で、8条の卸目を認める。備前産であろう。以上の土器

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

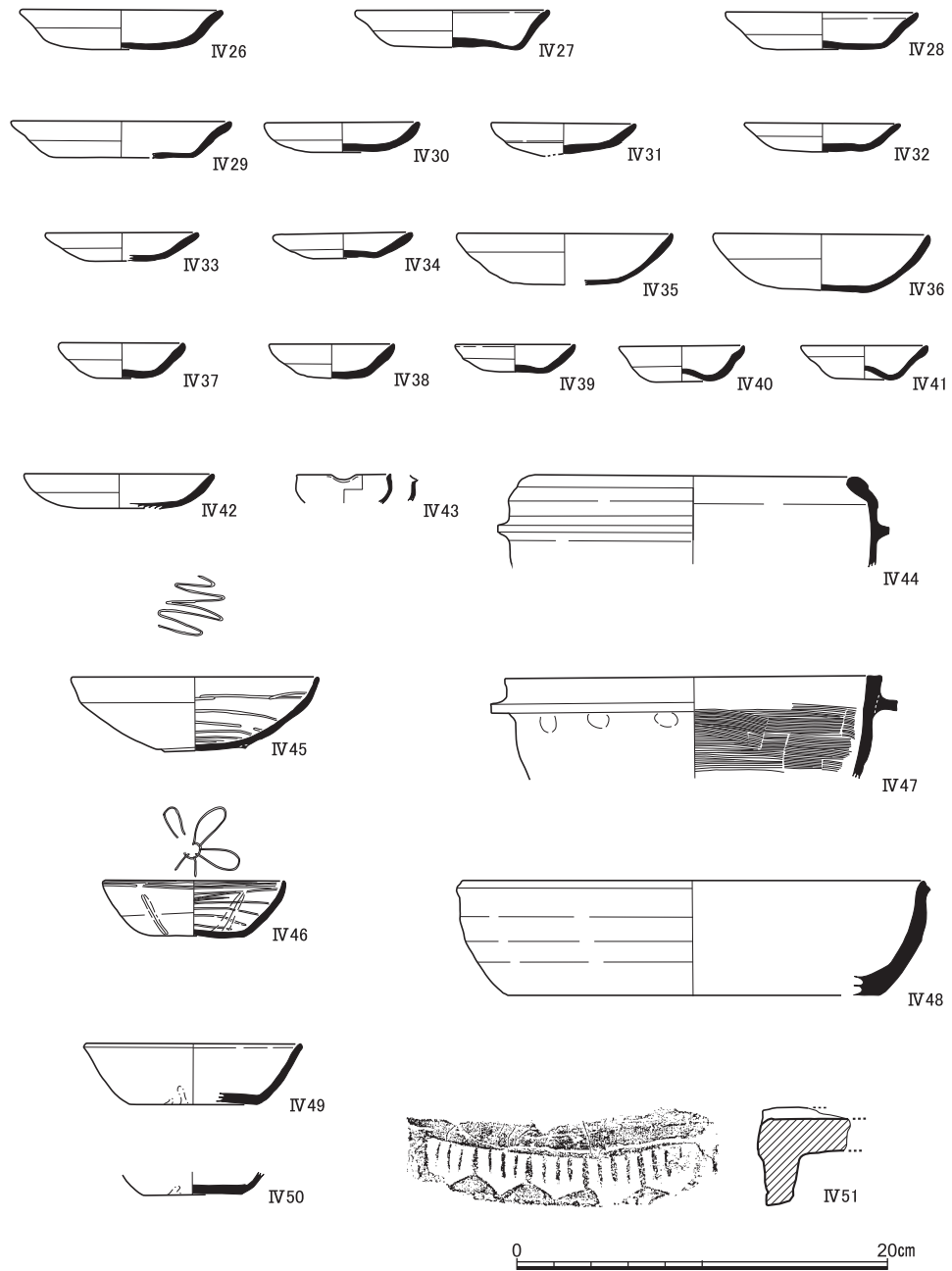


図117 S E 1 出土遺物 (IV26～IV44土師器、IV45～IV47瓦器、IV48灰釉系陶器、IV49・IV50白磁、IV51軒平瓦)

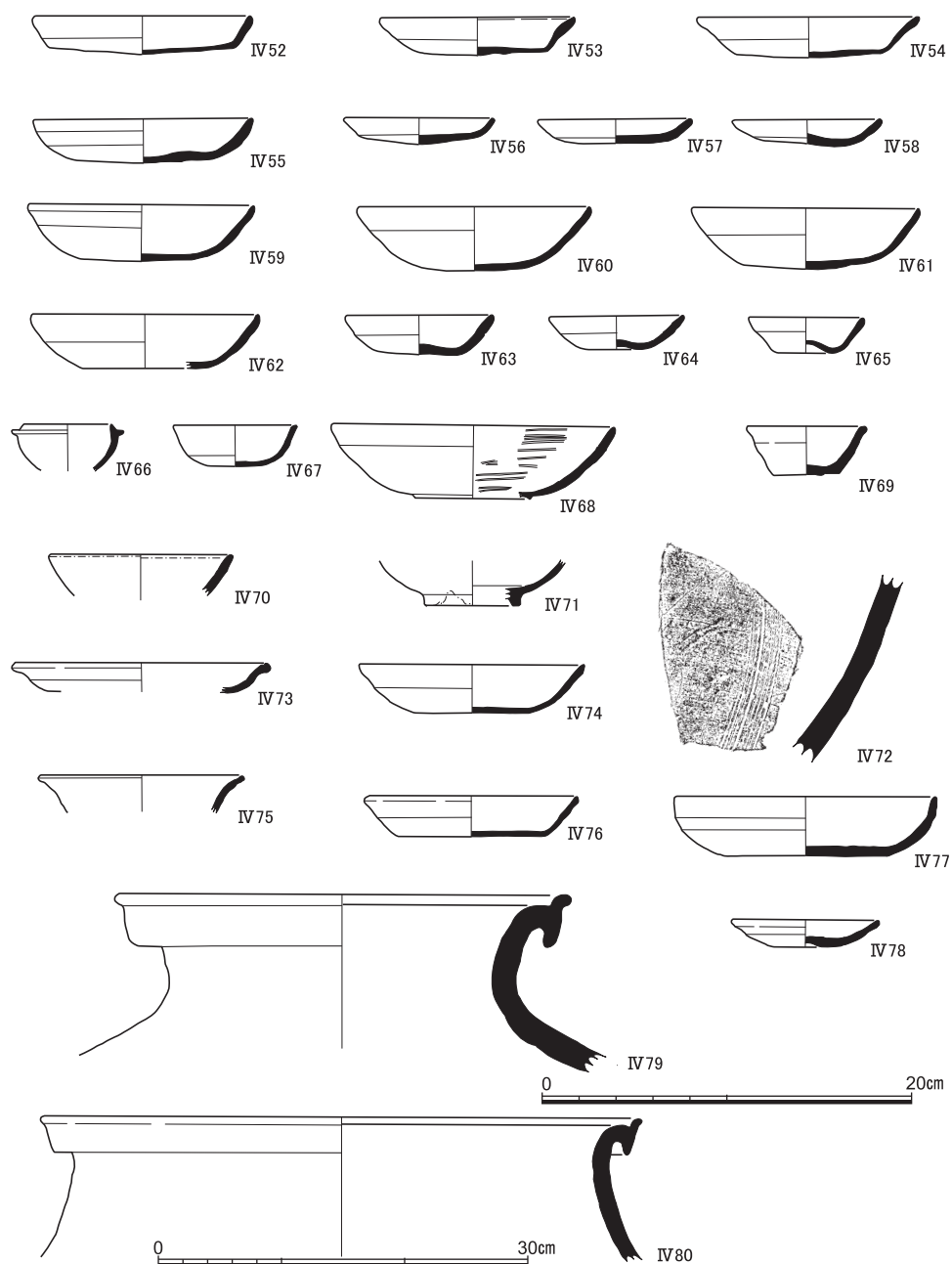


図118 S E 2 出土遺物 (IV52～IV66土師器、IV67・IV68瓦器、IV69灰釉系陶器、IV70・IV71白磁、IV72陶器)、S D 1 出土遺物 (IV73・IV74土師器、IV75白磁)、S P 4 出土遺物 (IV76土師器)、S P 6 出土遺物 (IV77土師器)、S X 2 出土遺物 (IV78土師器、IV79・IV80陶器) IV80のみ縮尺1/6

自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査

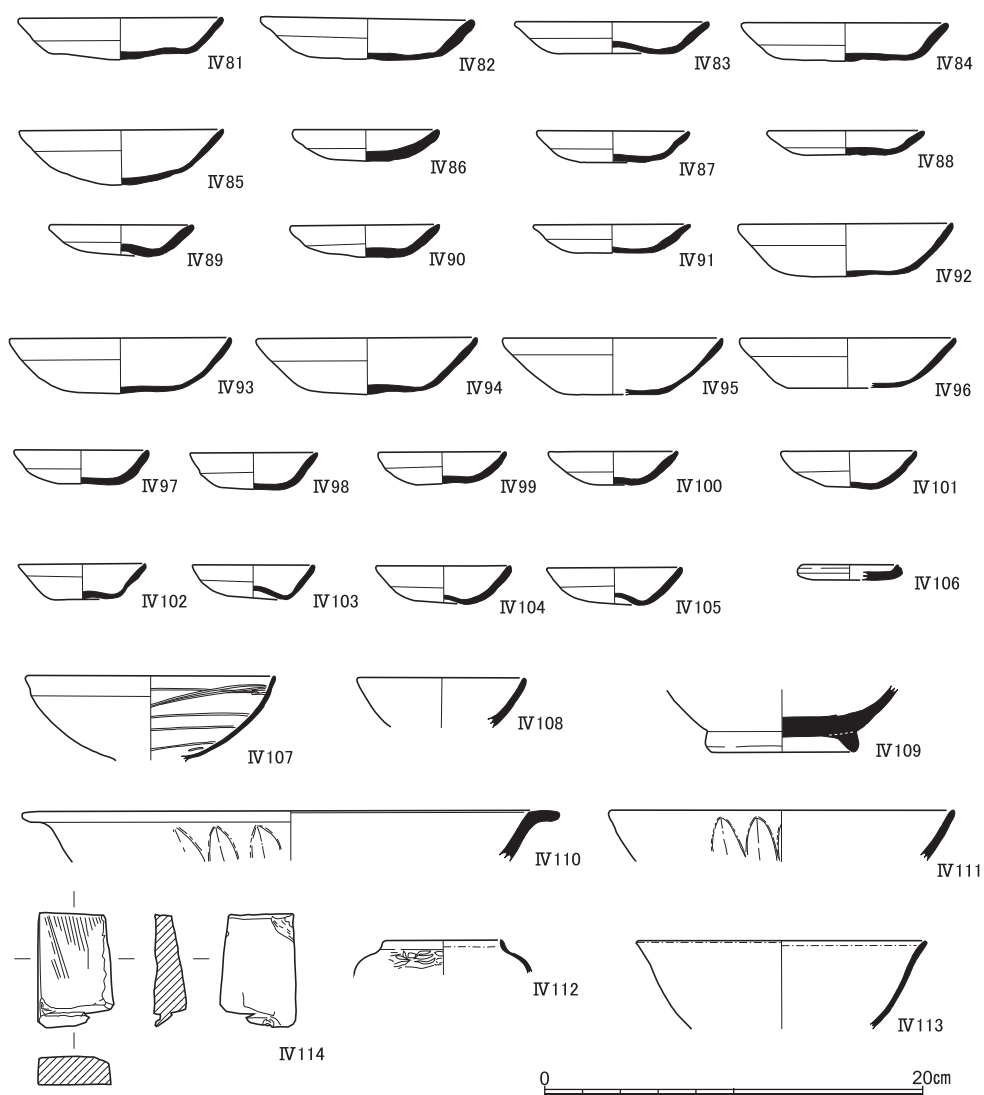


図119 茶褐色土出土遺物（IV81～IV106土師器、IV107瓦器、IV108・IV109灰釉系陶器、IV110・IV111青磁、IV112・IV113白磁、IV114砥石）

群も、土師器の様相を中心にみるならば、S E 1 と同様な14世紀前半代のものと評価できる。

IV73～IV75はS D 1 出土遺物。IV73はE₂類の皿，IV74は白色の碗。IV75は白磁皿で，口唇部が露胎しているもの。IV76はS P 4 出土遺物で，E₁類の皿。IV77はS P 6 出土遺物で，二段撫で手法C₃類の皿。厚手でしっかりとした作りである。今回の調査で二段撫で手法の土師器皿の出土はきわめて少ない。IV78～IV80はS X 2 出土遺物。大小2 個体の常滑産の陶器甕IV79とIV80の破片は互いに折り重なって密集しており，接合しない胴部破片は多数ある。これらの口縁部破片はともに上下におおきく肥厚するもので，14世紀代のものといえる。土師器皿E₁類の破片IV78がともに出土している。

IV81～IV114は茶褐色土出土遺物。IV81～IV106は土師器で，IV81～IV86はE₁類，IV87はE₂類，IV88～IV91はE₃類の皿，IV92～IV105は白色の碗。小型の碗の一部は凹み底となる。IV106は赤褐色を呈する受皿。IV107は瓦器碗で，内面にまばらに暗文風の横位ヘラ磨きがある。IV108・IV109は灰釉系陶器で，IV108は小碗，IV109はすり鉢の底部。内面は摩滅している。また底部外面の高台内側は，黒色に変質している。IV110・IV111は青磁で，洗と碗。外面に鎬蓮弁の装飾をもつ。IV112・IV113は白磁。IV112は小壺で，外面に浮き彫り風の装飾を認める。IV113は白磁碗。口唇部のみ露胎している。IV114は砥石。黄白色の軟質の石材である。両平面が使い込まれているほか，小口側は摩り切り後の折り取りを示す痕跡が明瞭に残される。以上の茶褐色土出土遺物は，おおむね13世紀後半～14世紀前半頃にかけてのものを中心としている。これら茶褐色土として取り上げた遺物の多くは攪拌・削平されたS D 1 の上面付近からの出土であり，本来はS D 1 の埋土中の遺物であった可能性が高い。

小 結 今回のA O 20区（G 9 地点）の発掘調査は，小面積で攪乱範囲も広がったにもかかわらず，中世の井戸状遺構2基を確認できたほか，多数の遺物が出土した。土の採取エリアが調査地周辺には及んでいなかったことが判明した点は，遺跡地周辺の土地利用を考える上で重要な情報と言えよう。基盤の粘土層を採取した遺構は，南方に位置する248・138地点などでは隙間無く全面に及んでおり，北側の74地点では西半を中心に分布している。今回の成果を考慮すると，密度の濃い中世の土の採取は，調査地よりも南を対象の中心とするとみられ，248地点との間に重要な土地境界が存在している可能性が考えられる。今回調査地の基盤層は，粗砂の埋積する流路が介在するなど，精良さの点で品質が劣るようにも感じられることから，そうした土地条件も反映しているのかもしれない。

上述した基盤の粘質土層からは、縄文後期の土器が複数点採集されている。周辺一帯の地形形成過程を復元する上で貴重な情報となるだろう。また、少量ではあるが奈良・平安時代の資料も出土し、遺構の可能性あるピットが見つかった点も、東に隣接する吉田南構内にひろがる当該時期の遺跡と関連を示すもので、注目すべき成果といえる。調査地においては、弥生前期末の土石流堆積層である黄色砂層や、その下層の縄文晩期～弥生前期の遺物包含層は確認されなかったものの、基盤層の標高が高い土地条件にあって、古代以前の比較的早い段階で西方の高野川から離水し安定をはじめていたと想定できる。今後医学部構内の東辺一帯においては、こうした古代以前の遺跡の遺存について、とくに吉田南構内に所在する遺跡との関連にも十分留意しつつ、調査を進めていく必要があろう。

(3) その他の地点の調査

G 6 地点の調査 207地点の発掘調査においては中世各時期の遺跡と遺物がみついているため、慎重な掘り下げをおこなった。しかし調査区西半は基盤の砂礫層まで完全に破壊されており、遺跡は遺存していなかった。このため、包含層の残る調査区東半の北壁沿いと東壁沿いを人力で掘り下げるとともに、それぞれ壁面の地層図作成をおこなった。

調査の結果、現地表下80cm程度まで表土層があり、近世の耕土層である灰褐色土は一部にごく薄くしか堆積が確認されなかった。それ以下は、床土とみられる黄灰色土や暗灰褐色土が40cm程度、その下部に10cm程度の厚さで中世の土師器細片を含む茶褐色土が堆積し、基盤の砂礫層に達する。東壁においては、南側へと10cm程度下る近世の棚田状段差が把握できた。大学設置時の地積図によれば、調査区付近を東西方向にはしる田畠の区画が認められる。南へと下る棚田状の景観であったのだろう。これ以外に顕著な遺構の存在は確認できず、中世・近世とも遺物出土は非常に少なかった。

G 7・G 8・G 10 地点の調査 いずれも医学部構内で、掘削時の立合調査を実施したが、すべてが攪乱土で遺跡は確認できなかった。建物に隣接した位置であるため、それらの建設の際に掘削されてしまったものと思われる。

G 12・G 13 地点の調査 病院西構内に位置する2カ所の調査。G 13地点は既設管路が密集した位置にあたり、攪乱土のみで包含層は確認できなかった。G 12地点では現地表下50cm程度で近世遺物を含む黒灰色土層が30cm程度堆積しているのが確認された。遺跡として登録されている範囲よりも西に外れた位置にあるけれども、349地点などで見つかったような近世遺跡がこの地点まで及んでいることがわかった。今後注意を要する知見であると言えよう。

3 北部構内B A28区の発掘調査

(1) 調査の概要

本調査区は北白川扇状地の末端近く、京都大学北部構内の西南隅に位置し、北白川追分町遺跡の西端にあたる（図版1-405，図120）。周辺地区の調査成果を勘案して、工事区域全域の発掘調査を実施した。調査期間は、2013年12月11日～2014年1月6日。工事区域が発電設備建屋部分とオイルタンク設置部分に分かれていたため、前者を東調査区、後者を西調査区として調査をおこなった。調査面積は、東調査区が31.5㎡，西調査区が19.2㎡，合計50.7㎡である。近世の土器・陶磁器を中心に、整理箱1箱分の遺物を得た。発掘調査と整理作業は千葉豊が担当し、長尾玲が補佐した。

本調査区の東80mに位置する6地点（1972年調査）は、本学構内における組織的な発掘調査の嚆矢となった地点である〔石田・中村・中村1972，伊藤1999b〕。この調査で弥生前期末中期初頭にこの地一帯が土石流堆積物で覆われたこと、2mに及ぶ厚い堆積物の下層に弥生時代前期以前の遺跡が包含されていることが明らかになった。本調査区の北に隣接する208地点の調査〔浜崎ほか1995〕では、6地点で検出した弥生前期の地表面が西側へと広がっていることを明らかにしたほか、弥生時代の地震痕跡、古代の埋納遺構、幕末の土佐藩邸の堀跡を検出するなど、先史時代から幕末に至る土地利用の変遷を明らかにする重要な情報を得ている。

今回の調査地点でも、上記したような先史時代以降の土地利用形態を明らかにすることを目的に調査をおこなったが、とりわけ本調査区が208地点の南端で見つかった土佐藩邸堀跡のすぐ南に位置し、現在の今出川通の北にあたるため、幕末期のこの地点がどのよう

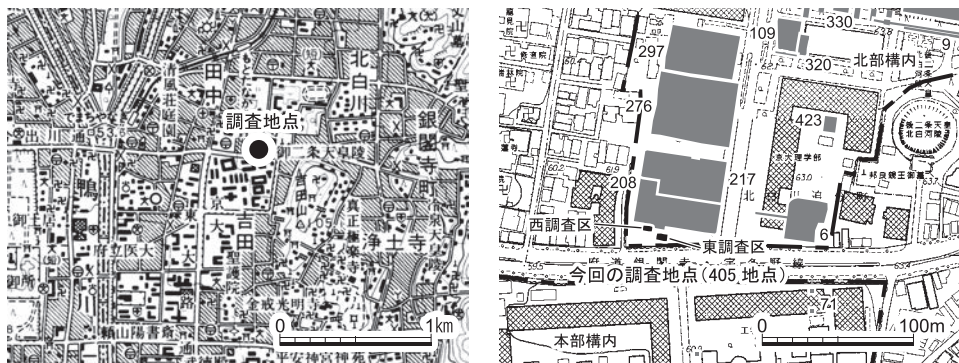


図120 調査区の位置 縮尺 左1/5万，右1/5000

な場所であったのかを解明することを第1の目的とした。

(2) 層 位

図121に、西調査区北壁の層位と東調査区東壁の柱状層位を示す。

基本層序は上から、表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、灰赤褐色土（第3層）、茶褐色土（第4層）、黒褐色砂質土（第5層）、黄色砂（第6層）、黒褐色土（第7層）、暗褐色土（第8層）、褐色砂質土（第9層）、黄白色砂（第10層）となる。

第2層の灰褐色土は層厚20cm、第3層の灰赤褐色土は層厚15cm前後の耕作土で、近世から近代のほか、中世に遡る遺物が出土した。第4層の茶褐色土は層厚10～20cm前後で、古代～中世の遺物を包含する。第5層の黒褐色砂質土は層厚15cm前後で、東調査区のみで認められた。第6層との層界は不明瞭で、漸移的に移行している。遺物の包含は認められなかった。

第6層の黄色砂は、北部構内から本部構内、吉田南構内一帯に広く分布する弥生前期末の土石流堆積物。層厚190cmに及ぶ粗砂（6a層）と、その下位に層厚5cm前後で堆積する微砂（6b層）に細分できる。第7層の黒褐色土は、層厚10cm前後で腐植にとむ土壌。西調査区では、粘質である。弥生か縄文かの判別も困難な土器の小片が1点出土したのみ

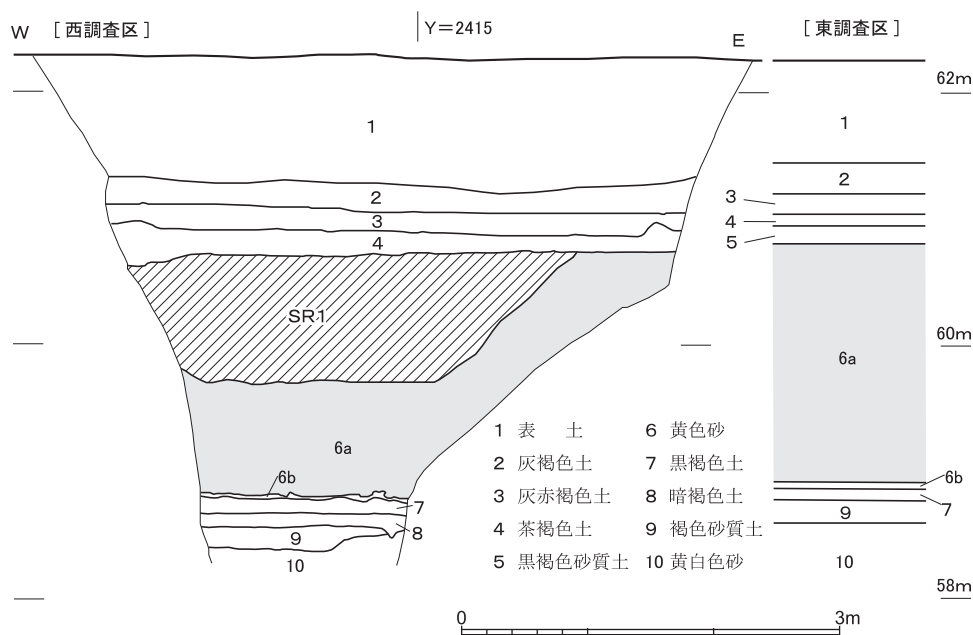


図121 層 位 縮尺1/60

である。第8層の暗褐色土は土壌化層で、第7層から漸移的に変化して第9層の褐色紗質土に漸移的に移行する。第10層は黄白色の砂。掘削深度が地表下4 m近くに達したため、安全面を考慮してこの堆積物を確認したのちに調査を終了した。第8層～第10層からは遺物は出土しなかった。

(3) 検出遺構 (図版39, 図122)

図122左に、茶褐色土・灰赤褐色土上面で検出した遺構、図122右に、黄色砂上面で検出した遺構を示す。

茶褐色土・灰赤褐色土上面検出遺構 東調査区・西調査区ともに、耕作に伴うとみられる円形ないし方形の小穴のみ。

前述したように、本調査区の北に隣接する208地点では、調査区南端で東西に延びる幕末の土佐藩邸堀跡が見つっている。今回の調査区は、この堀跡のすぐ南隣接地点にあっており、今出川通が今回の調査区の南側をはしっている。土佐藩邸の堀が当時の今出川通に接するように設置されたとすれば、旧・今出川通が見つかるのではないかという予測

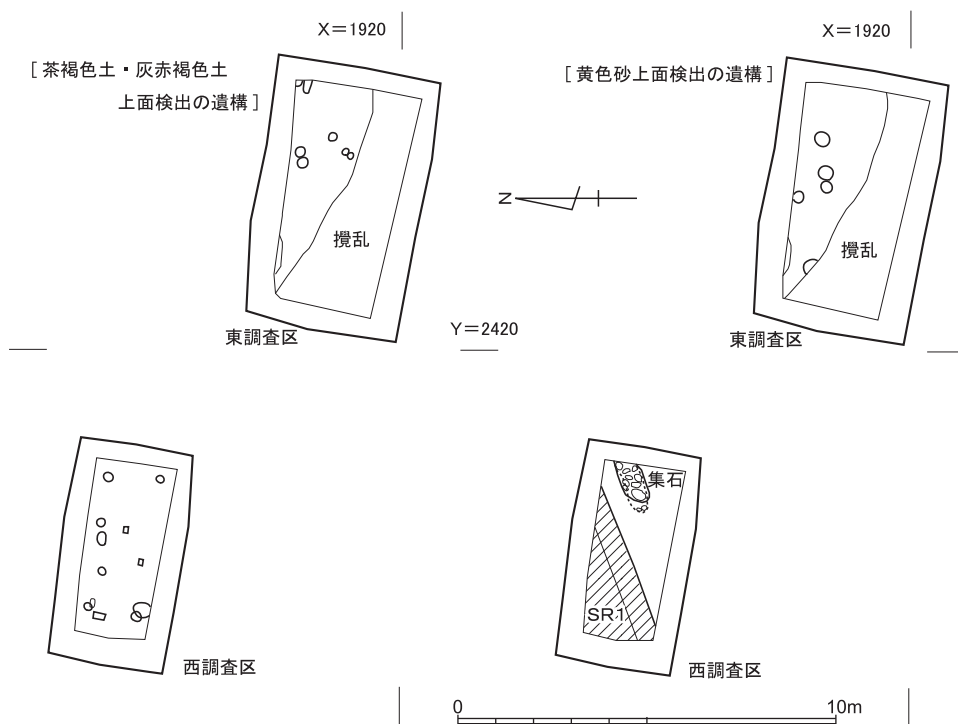


図122 検出遺構 縮尺1/200

のもとに調査を進めたが、道路は調査地区まで及んでいなかったことが判明した。

黄色砂上面検出遺構 東調査区では、直径30～40cm前後のピットが5基みつかった。柱穴の可能性が高いが、狭小な発掘区のため、並びなどの復原はできていない。西調査区では、茶褐色土を掘り下げる過程で、人頭大～小児頭大の礫が集中している部分がみつかった。北東－南西に細長い分布を示し、幅は60cm前後、長さは東端が調査区外へと続くが、確認長で1.5m前後である。掘り込みは確認できなかった。人工的な遺構と判断したが、次に述べるSR1と同一の方向をとるため、自然による集石の可能性も考慮しておく必要があるかもしれない。

茶褐色土を掘削後、黄色砂上面で掘り込んで、北東－南西にはしる自然流路SR1がみつかった。小礫を埋土とし、確認面からの深さ約1m。北側の立ち上がりは調査区外となるため幅は不明であるが、208地点で見つかった自然流路SR1（幅約2.5m、深さ約1m）の延長にあたるものとみてよいだろう。

(4) 出土遺物（図版39、図123）

東調査区出土遺物（IV115～IV123） IV115～IV117は茶褐色土出土遺物。IV115は2段撫でC₃類の土師器皿。IV116・IV117は黒色土器で、IV116は内面のみを黒色処理するA類で、椀の底部。断面三角形の高台がつく。IV117は、球胴の体部に外に開く口縁部をもつ甕。内面は刷毛目調整で仕上げる。外面には、煤が厚く付着している。土師器は12世紀代、黒色土器は10～11世紀代のものであろう。

IV118～IV123は灰褐色土出土遺物。IV118は陶器土瓶の底部。IV119は磁器色絵の蓋。IV120は磁器染付の椀。口縁部は端反で口銹としている。IV121は白磁の椀。IV122は磁器染付の仏飯。IV123は蠟石製の石筆。現存長3.8cm。実測図上側から6mm下がった位置に、長軸に対して直交方向に切り込みを入れて頭部を作り出している。

西調査区出土遺物（IV124～IV140） IV124・IV125・IV128は、灰赤褐色土出土遺物。IV124・IV125は13世紀代の土師器皿。いずれも1段撫で素縁のD₃類である。IV128は近世後半の陶器蓋。

IV126・IV127・IV129～IV140は灰褐色土出土遺物。IV126は土師器炮烙。IV127は陶器小皿で、見込みに鉄絵で文様を描く。IV129は陶器蓋。IV130・IV131は陶器灯明皿、IV132は陶器灯明受皿である。IV133は見込みに型押しで竜文を描く珉平焼の皿。IV134は磁器色絵の椀。IV135～IV138は磁器染付の椀。IV135・IV136・IV138は型紙刷りで化学コバルトを用いている。IV139は磁器染付の段重。口縁部の釉を剥ぐ。IV140は、泥面子のうち芥子面

北部構内B A28区の発掘調査

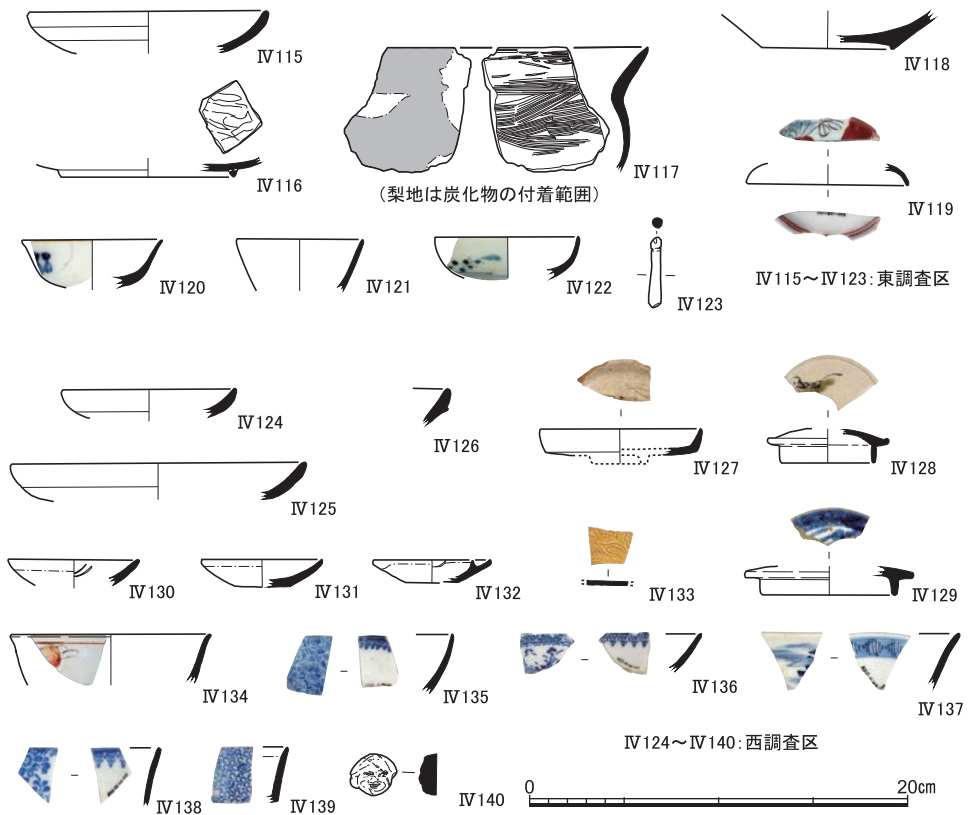


図123 出土遺物（IV115～IV123東調査区出土，IV124～IV140西調査区出土）

と呼称されるもの。人物の顔を表現し、目・口に彩色を施している。

(5) 小 結

今回の調査で第1の目的とした幕末期の様相に関しては、耕土層の広がり認め、道路状遺構は今回の調査区までは及んでいないことを確認したことにより、土佐藩邸の南限を限る堀と今出川通のあいだには、調査区付近では少なくとも10m前後の空間があり、耕作地が広がっていたことが明らかになった。今出川通は、少なくとも本調査地点より南、現在の通りと重複している可能性が高まった。

また、208地点の調査で検出した平安時代以前に遡る流路の南延長を西調査区で検出することができた。さらに、約2mの厚みをはかる弥生前期末の土石流堆積物の下で、弥生前期の地表面を改めて確認するなど、先史時代以降の土地利用の変遷に関する新たな情報を得ることができた。

4 北部構内の立合調査

北部構内では、前節で報告した発掘調査のほか、自家発電施設設置に関わるものとして、発掘調査1件（図版1-402地点）、立合調査2件（図版1-422・423地点）を千葉豊を担当者として実施した。縄文時代の遺物がまとまって出土した402地点の調査成果については、次年度の報告を予定しているので、ここでは、立合調査2件の成果を報告する。

422地点は北部構内のほぼ中央に位置し、299地点〔富井2008〕の北西端の地点である。423地点は北部構内の南西辺、理学研究科1号館中庭の北端に位置する。両地点とも、管路などにより残存状況がよくなく、遺構検出はできなかったが、層位を記録することができたので、ここで解説しておきたい（図124）。

422地点は、表土の下位に、暗灰褐色土、淡灰褐色土、暗灰褐色土、灰褐色土、赤褐色土、黒褐色土と続き、その下位は砂取穴の埋土となっている。これは、299地点の北壁層位と整合しており、第2層～第7層は中世から近世に及ぶ耕作土と理解できる。

423地点は、既存管路などにより歴史時代の包含層は失われており、表土（第1層）の下位は、弥生前期末の洪水層である黄色砂（第9層）であった。この下位に、やや土壌化した灰褐色粘質土（第10層）が認められ、ここから弥生前期土器の小片が出土した。

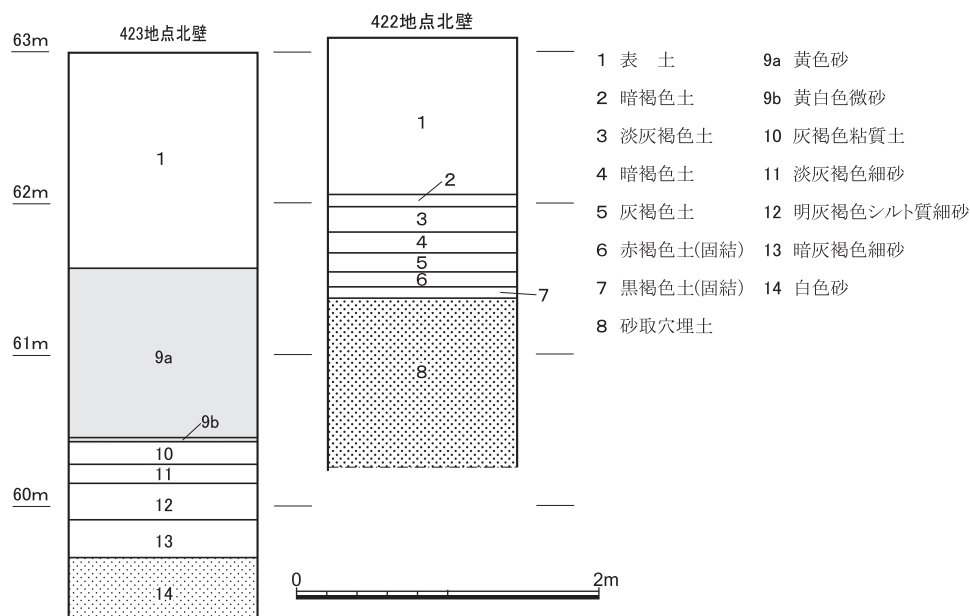


図124 422地点、423地点の柱状層位 縮尺1/50